2023年
5月 1日
No. １３８
隔月１回発行

特定非営利活動法人
レター・ポスト・フレンド相談ネットワーク会報

ひきこもり

イラスト　小松　英行

会報は札幌市さぽーとほっと基金助成事業・ひまわりピア・サポート基金により作成されています

Ｉｎｄｅｘ

2ページ　活動報告～2023年度新規助成金事業
3ページ　活動報告～よりどころ家族会で話題提供「健康・体調との向き合い方」／2023年度第1回理事会を開催
4～5ページ
2022年度KHJ全国ひきこもり家族会連合会研修会
手紙や SNS 等を用いた非対面支援について語る ほか
6ページ　シリーズ　親亡き後を生きるひきこもり当事者 （第1回）
7ページ　北方ジャーナル 「ひきこもり経験者」を初選出 セーフティネット整備に意欲／購読者ハグレメタルさんからの投稿
8ページ　こちら事務局／編集後記

２０２３年度新規助成金事業①
親亡き後を生きるひきこもり当事者の老後を支え合う事業

近年両親が逝去し支えを失った当事者が、最悪な事態に陥らないよう親亡き後を生きるひきこもり当事者の老後を支え合う事業を関係団体の協力のもと実施する。

５月に「ひきこもりの老後を支え合う連絡協議会（略称：ひ老連協）」を内外の有識者で組織化し、事業推進に必要な事項を協議する。８月をめどに対話交流会（オープンダイアローグ）を二部構成で開催する。第一部では会場とオンライン併用のハイブリット開催による「８０５０世代をどう支え合って生きていくか（仮題）」をテーマに高齢の片親のもとで暮らす50代当事者などが登壇し、対談形式のパネルディスカッションを行う。第二部では参加者が小グループ（オンライン参加者はその人たちだけのグループ）に分かれて「福祉制度の狭間に置かれやすいひきこもりにどう対応するか（仮題）」について討議する。ピアスタッフがファシリテーターを担い、全体でシェア共有できるようにしていく。対象者はひきこもりに関心を抱く市民のほか、行政や企業人、支援者に幅広く呼び掛ける。本事業は１回限りでは成果を出すことは難しいため会報誌に特集記事連載欄（６ページ参照）を設け、事業の継続性を担保していきたい。本事業は令和５度札幌市市民まちづくり活動促進助成金（さぽーとほっと基金）として実施する。

２０２３年度新規助成金事業②
ひきこもり８０５０問題対応型地域支援拠点設置事業

当ＮＰＯが長年取り組んできた地域拠点型アウトリーチ事業で、昨年に引き続き札幌圏２地域（江別市：月２回拡充して実施）と、新たに北広島市が加わり「ひきこもり８０５０問題対応型支援拠点」を実施する。

各市の拠点に集まった中高年層のひきこもり当事者やその家族の事例をもとに、「中高年ひきこもり当事者のひきこもりに至ったきっかけ」や「各支援拠点にたどり着くまでの経緯」を探り「中高年ひきこもり当事者の視点に立った今後求められるひきこもり支援政策」を検証し解明していく。

５月には札幌圏２地域にそれぞれ現地実行委員会を設置し現地統括窓口となりうる団体機関を指定し、６月をめどに会場開催又はＺＯＯＭオンラインにより拠点事業を開催。参加者を募り月１から２回の頻度で計各５から10回開催し８０５０問題の解決策を探る。支援拠点では、ひきこもり経験を有するピアスタッフが地元支援団体機関の専門職と協働しながら各回ひきこもり８０５０問題にまつわる話題提供を行う。後半は、これら話題提供を受けさらに参加者同士で議論を深められるスモールグループワーク活動を行う。本事業は２０２３年度公益財団法人日本社会福祉弘済会社会福祉助成金：研究事業として実施する。

２０２３年度新規助成金事業③
赤い羽根ポスト・コロナ社会に向けた福祉活動応援キャンペーン事業

新型コロナ禍の影響が長期化するなかで社会的孤立や経済的困窮など課題が深刻化している。誰にも相談することができないまま地域の中で孤立することで、さらに悪化してしまう危惧がある。これらを予防していくためには住み慣れた地域でこうした課題がある人に気づき、つながり、見守る人たちの存在が必要となる。本事業ではwithコロナ禍の地域で孤立に気づき、つながり、見守る人材、いわゆるつながりワーカーを育成していくことを目的に、動画視聴による講座90分とこれに基づくつながり、見守る活動（居場所事業など）実践を行うものである。年内12月までに１回講座を開催し、当ＮＰＯが実践する当事者活動で当事者の孤立に活かすものとしていきたい。またこれに関心を寄せる人たちも対象としたい。新規実働者を増やすことも視野に入れる。

本事業は社会福祉法人 中央共同募金会第２回地域での孤立に気づき、つながり、見守る人材（つながりワーカー）養成および実践活動助成事業として実施する

私たちの仲間になりませんか
会員募集をしています

詳細は団体のホームページをご覧ください。
https://letter-post.com/

2022年度 KHJ全国ひきこもり家族会連合会 研修会
手紙や SNS 等を用いた非対面支援について語る

２月25日（土）ＫＨＪ全国ひきこもり家族会連合会主催で、ひきこもりの理解と支援の向上を目指した「ひきこもり問題の理解促進と支援力向上のための研修会」が開催された。本研修会の研修項目の一つとして「手紙やＳＮＳ等を用いた遠隔による支援」「手紙を用いた本人との関わり方の工夫と配慮」について取り上げ、当ＮＰＯから田中敦理事長、吉川修司理事、鈴木祐子監事の３名が登壇し、長年に渡り続けてきた手紙によるアウトリーチ活動について発表した。本稿では三氏の発言内容に編集を加えて採録する。

在宅でできる非対面支援

当ＮＰＯでは様々な取り組みをしているが、私たちの活動は外向きだけではなく内向きの活動にも着目している。ひきこもり当事者は在宅する時間が長いが、それ自体が悪いわけではなく、当事者が望んでいることは「ひきこもりながらどのようにして生きていくか」であり、その道筋を考えることが無理のない生き方に繋がる。お金を稼ぐといった経済的な面だけではなく精神面をどう支えていくか。それが当事者の意欲向上にもつながる。そこを「手紙によるピア・アウトリーチ」などの非対面支援でどこまでつくり上げていけるかを考えながら取り組んでいる。

非対面支援は全て当事者が関わって対応している。自宅でできることなので当事者にとっても参加しやすい。当事者自身がもつ知見、趣味趣向を駆使しながら無理のない形で社会と結びつくことができる。

当ＮＰＯが発行している会報は現在までに１３６号発行しているが表紙のイラストや文章は全て当事者の力作だ。このような当事者がもつ能力を活かしていく場面を作りだしていくことがとても大事だ。また当ＮＰＯのホームページで開設しているチャットワークを利用して日頃語ることのできない愚痴などを書き込んで交流する。そこで新たな当事者同士のコミュニティが出来上がる。非対面支援では電子媒体によるメタバース（仮想空間）やアバター（顔・服装などを自由に選択してつくったオリジナルのキャラクター）の活用も当事者にとって有効なツールとなる。メタバースの活用は、できることは可能な限り準備して『失敗を恐れずやってみる』ことが大事。

手紙によるピア・アウトリーチ

私たちの団体では封書の手紙よりも葉書を活用して当事者宅へ送付する取り組みを行っている。これも広い意味でのアウトリーチであり侵襲性の少ない支援と捉えている。封書の手紙にしないのは文章だけが長くなると余計なことを書いてしまう恐れがあるからだ。ハガキではできるだけ短文にしてイラストや写真をみてもらう。場合によっては手紙を送る場合もあれば、当事者宅へ訪問支援した際に家族から本人（会えない場合）に渡してもらう方法もある。このように対面と非対面を併用していく場面もありえる。とくにコロナ禍では、対面と非対面の利点を活用した折衷的な対応が必要だと思う。

葉書にはひきこもりの当事者が作成してくれたカラフルなイラストや撮影した写真をプリントアウトして月２回程度の頻度で送付している。送る

（写真-1）鈴木祐子ピアスタッフが講師となりポストカード作成講座を実施した時の受講生の作品。動物が飛び出す立体的なものから押し花を散りばめたものまで多彩な作品が揃った。右下は当事者の描いたイラストからイメージをふくらませ別の当事者が詩を創作したコラボレーション。このような個性的で面白さあふれる葉書にピアスタッフがコメントを書き送付する（研修会資料集から転載）。

頻度や間隔は受け取る側の当事者のことも考える必要があるが、葉書を送る側として実働するピアスタッフが負担感のないよう無理のない範囲で取り組むことが長く続けるための秘訣だ。

当事者の心情を理解する

当ＮＰＯが取り組んできた手紙によるピア・アウトリーチに対する評価（利用者20名に対する事後評価調査）からみえてきたひきこもり当事者の状態では、無職で中高年層の利用者が多い。気持ちの面では「将来のことが不安だ」「思うように行動できない」「世間体・地域の目が気になる」と答える当事者が非常に多い。こういった当事者の心情をよく理解することが大事だ。また葉書を受け取り「書かれているメッセージが良かった」と回答した割合が６割を超えていたことからピアスタッフのもっている相手の気持ちに寄り添う力という強みが発揮していたと考えられる。

具体的な感想では「返事を書かなくてよいところが良い」「最初は嫌だったが今は楽しみに待っている」「もうダメではないかと思っているときに助けられる」など好意的に受け止められ、孤立予防、細く繋がる意義が手紙によるピア・アウトリーチの取り組みから理解できる。

（田中理事長）

信頼関係を得た交流に発展

絵葉書活動は、１９９７年に不登校の親の会を設立して孤立していた母親に送ったのがきっかけ。子どもが希望したわけではないので返信は無用。読むことも強要しない。葉書が必ず本人宛に届くことが大事。この活動の良さは接触が間接法で読み手の負担が少ない。届いてもすぐ対応する必要はなく読みたいときに読むことができる利点もある。

２００８年ころから不登校だけではなく、ひきこもりの当事者に送るようになった。一つの事例を紹介する。30代の当事者Ａさんに対して葉書を送付していくうちに信頼関係が芽生え交流が始まる。その後Ａさんは有償のボランティア活動に参加、親の会の手伝いまで対応してくれるようになった。また不登校の子どもたちへ葉書を書いてくれるようになった。現在もＡさんとの交流が続き色彩豊かな花の図柄のイラストを葉書に描いて送ってくれる。私自身も癒されている。

私にとっての絵葉書活動とは、書くことが好きということや誰かに伝えたい思いが原点にありライフワークとなっている。

（鈴木監事）

思い入れをもたず自己表現の場にも

２０１６年９月から開始。その後、毎年継続し２０２２年度は７名の当事者や家族に月２回程度送付する。イラスト、写真などの絵葉書を使用するほか、手づくりのメッセージカードを送ることもある。「微笑みながらみることができる」内容をこころがけ、相手に対する期待感や「こうなってほしい」などの思いはもたない。相手が同世代の場合は共通の話題を提示する。

活動の利点として「時間の制約がなく、やれるときにできる」「直接会わないので気楽な気持ちでできる」「自分の持ち味を活かした表現ができる」など。効率性を重視した時代に、ゆっくりとしたコミュニケーションをとる良さを感じる。

（吉川理事）

20230518 朝刊 （生活・くらし）

ひきこもりの老後 支え合う

道内6団体が連絡協発足

当事者と民間支援者 連携サポート

©北海道新聞社

北海道新聞に掲載～ひきこもりの老後を支え合う―道内６団体が連携

2023年５月８日付北海道新聞朝刊くらし報道部欄に当NPOが設立した「北海道ひきこもりの老後を支え合う連絡協議会」の記事が掲載された（左写真）。

記事には50代当事者の悲痛な訴えを契機にして協議会設立に至った経緯や、８月に開催予定のパネルディスカッションの予告が掲載されている。また、当NPOの田中理事長は連絡協議会発足について「家族の期待も大きい。ピア・サポートならではの敷居の低さや話しやすさを生かし当事者と支援者との接着剤となる役割を目指したい」と述べている。

刊行物の紹介

『北方ジャーナル「ひきこもり経験者」を初選出　セーフティネット整備に意欲』

レタポスの田中敦理事長が全国組織KHJの理事に就任

「ひきこもり経験者」を初選出
セーフティネット整備に意欲

月刊情報誌「北方ジャーナル」２０２３年５月号

レター・ポスト・フレンド相談ネットワークの理事長田中敦氏が４月１日付でNPO法人「NPO法人全国ひきこもり家族会連合会」の理事に就任した。田中氏は同会の支部北海道「はまなす」の事務局長を兼務しており、2019年10月には「第14回KHJ全国大会in北海道」を成功させている。ひきこもり経験者の立場で北海道からはじめて理事に選出された田中氏に意気込みを聞いた（本文より一部転載）。ジャーナリストの武智敦子氏が取材執筆する。（有）Re Studio発行　A4版　定価880円

購読者ハグレメタルさんからの投稿「人の力」

自分はよく感じるんだけれど、人に傷つけられてきた人が、回復するにはもう分かりきっている事なんですけど、やっぱり人の力が必要になります。人とのめぐり逢いは、偶然じゃなくて必然のような気がとてもします。それをつかむかつかめないかは、運ではなく自分の行動だと自分は強く思います。

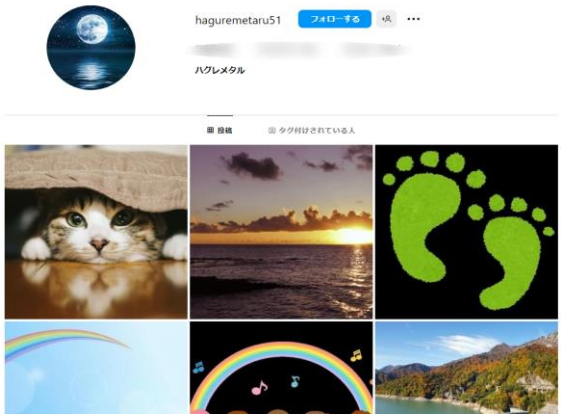
そこで必要となってくるのはピアスタッフの方々の力です。人間らしさを取り戻させてくれる。一緒におもいっきり遊んで、時には慰め合って、真剣な話もします。喜び合ったり、悔しがったりしながら、共に時を乗り越えていきます。生きてるって実感させてもらえます。

ちなみに自分はレター・ポスト・フレンドの大切な仲間の訪問を月2回受けています。出会いは去年オンラインで開催された小樽の自助会の時でした。仲間は自分より11歳若い方です。でもお互いゲームや野球観戦が大好きで、趣味がとても同じでした。仲間は常に場を和ませる力を持たれている方で、若いのに沢山苦労されてきたのかなって思います。でも自分の意志をはっきり持っていて、意見をはっきりと言葉にしてくれます。自分は仲間の自然体でいる時が大好きです。自分の持っていないものを、沢山もたれています。

仲間は16年こもりびとでした。自分は19年軽い外出はできるけど引きこもり状態の当事者です。そして支援者には代わりがいても、ピアスタッフの方達には、代わりがいないというところですね、それだけ自分はピアスタッフの方達が、大切な存在ってことになります。

ピアスタッフの方達が当事者を経験してきてくれているから、引きこもりの僕らに寄り添ってくれます。支援者には残念ですけど、真似できません。だけど支援者には給料が発生します。ピアスタッフの方達はどうでしょう、何の違いがあるのでしょうね。

当事者の自分は、支援者の方達よりピアスタッフの方達に助けてもらいましたし、安心感も全く違います。ピアスタッフの方達にもそれに見合ったお金が発生しても、良いんじゃないんですか、生活がかかっているのですから。当事者の自分は強く思います。



ハグレメタルさんはインスタグラムで自作の詩や文章を公表しています。
haguremetaru51 のアカウントでご覧いただけます。

シリーズ　親亡き後を生きるひきこもり当事者　（第１回）
吉川修司さん～生き恥をさらして五十路なに思う

5 月に発足した「ひきこもりの老後を支え合う連絡協議会」ではひきこもり当事者が両親の死後、孤立しないで生きていくためのネットワークづくりに取り組んでいます。本稿では親を亡くして生活を続ける当事者に現在の心境や今後の課題や展望について語ってもらい、来るべき将来当事者が老齢期を迎え親亡き後を生きていくための有益な情報をお届けします。第 1 回は当 NPO の理事・吉川修司（55）さんが父親の十三回忌を迎えた現在の心境を語ってもらった。

私の両親はともに５月に亡くなっている。母親は 34 年、父親は 12 年経過した。命日が２週間違いであるため、５月はとくに親のことを思いだす時期でもある。

父親は余命宣告を受けたあと自宅で看取った。当時 40 代だった私は、ひきこもりではあったが、在宅で面倒をみることができたので看護が可能となった。病院で最期を迎える選択肢もあったが父親が在宅を希望したため、私も異論なく同意し、亡くなるまでの約 1 か月半をともに過ごした。それが最後の親孝行といえるかどうかはわからないが、在宅看護を全うできたことは良かったと思う。

あれから 12 年。5月５日に行った十三回忌法要には兄夫婦と子ども（姉妹）が揃って訪れた。子どものうち長女は結婚し、二女も年内に結婚する予定だ。長女が 30 歳だと知り自分の生きてきた 30 年と重ね合わせたときに、自分は今まで何をしてきたのだろうか、己の無能感を痛切に思い知るのである。50 歳を過ぎるとたいていのことは寛容になれるのだが、ことに自分のことになると「失敗だったな」と思ってしまう。

兄夫婦と私との関係は大きな軋轢はないが、収入がそれほどあるわけではない現在の生活をみて心配をかけているのが現状だ。兄夫婦からは「困ったことがあれば何でも言ってほしい」と言われ、内心はできの悪い弟をもったことへの情けなさを感じているのかもしれないが、NPO 活動については理解を示し、遠目から見守ってもらえることはありがたいことだ。

前年度の会報で連載した「ひきこもりと高齢家族介護」では４人のひきこもり経験者が赤裸々に高齢化する親と自分の現状を語ってくれたが、私は紙面とはいえそこまで語る自信がない。ただいえることは、現状のままで老齢期まで迎えることは非常に課題が多いということだ。現在は団体活動のほか、委託を受けた在宅ワークをこなす程度の収入しかないため、経済的な問題は避けて通れない。また健康上の課題でいえば、昨年秋から腰痛を悪化させ一時は歩行が困難となり、メンタル面でも落ち込んだ時期が長く続いた。50 代半ばは健康上のリスクが際立つ時期でもあり、別項の「健康・体調との向き合う」欄でも指摘されているように健康をどう保つかは親亡き後を生きていくうえでも優先順位の高い問題だと痛切に感じる。

６月から電気料金が値上げされる。値上げにより生活の質を落とすことが健康上のリスクを高めることにも繋がる。このような状況だからこそ、似た境遇にある人たちや理解ある人たちの力を借りることも必要になると思う。私の場合、腰が悪くなったと SOS を発すれば食材の提供や、必要なものを購入してもらうなど知人からの協力が得られた。これはピア・サポート的な連帯性の現れだと感じる。

ひきこもり人権宣言（暴力的「ひきこもり支援」施設問題を考える会作成）第７条の条文には「ひきこもり状態を自分の力で抜け出せなくなった人は、人や社会に頼ることを否定されない」と定めている。私は生き恥をさらして 50 代半ばに達したいち当事者で前途多難であるが、公的なサポートも含め頼れる部分は頼ってもよいと思えれば、ひきこもり生活も多少は気楽になるのではないだろうか。今般「ひきこもりの老後を支え合う連絡協議会」の発足により、親亡き後も健康で生きていける道筋がみえてくれば、私も含めひきこもり当事者や家族の福音になると信じてやまない。

皆様からの投稿をお待ちしています

〒０６４－０８２４　札幌市中央区北４条西２６丁目３－２
「NPO 法人　レター・ポスト・フレンド相談ネットワーク」事務局　通信編集部　宛
ｅ－ｍａｉｌ；info@letter-post.com

よりどころ家族会で話題提供「健康・体調との向き合い方」

5月8日（月）に開催されたよりどころ家族会では「健康・体調との向き合い方」について当事者ピアスタッフ2名が話題提供した。本項ではその内容の一部を採録する。

目的が見えてくると自ずから動ける

ひきこもっていた頃の体調について。私はストレスを受けると身体が動けなくなる体質で「セルフネグレスト」のような状況に陥り、自分のことを一切考えないで塞ぎこんでいた。その当時は自分が社会にでることで、社会が迷惑になると思い込んでいた。

そのような生活を続けているとストレスでお腹が痛くなる。病院へ行けないため市販の胃腸薬で痛みと闘っていた。ストレスを避けるために四六時中ゲームに熱中する日々が続いた。将来の見通しが立たないことにより無気力になり、歯も磨かず虫歯だらけ、入浴もせず頭髪も伸び放題の状態となる。とくに歯はかなり削り抜いた歯もあったが将来の目的が見出せないなかで治療しても無駄だと感じていた。家に居ながらにして「ホームレス」のような状態だった。

我慢していたお腹の傷みが胃腸薬だけでは効かなくなり病院へ駆け込んだことが契機となり徐々にひきこもりからの回復の道を歩むことになる。その病院は児童精神科があり、当時20歳過ぎの自分が特例で診てもらうことができた。併設された作業所に通うようになり、人前に出るため散髪もした。何かしら目的が見えてくると自ずから動けるようになった。現在は入浴もして散髪もできる。身体が痛くなったら病院へ行くこともできる。このように変化したのは長い年月はかかったが小さな積み重ねがあったからだ。

（大橋ピアスタッフ）

健康のリスクを考え定期健診を

一般的には健康と金銭的なことは連動していると思う。裕福な人は生命保険などに投資することもでき、病気の予防や治療にお金をかけることができるが、経済的に余裕のない人は小さな痛みでは病院へ行かないため健康の維持は大事であり、ひきこもり生活を生き抜くためにも経済状況に合わせた健康促進を考える必要がある。

私は日頃よりバランスのよい食事をとることを心がけている。ひきこもり当事者であるため食費にお金をかけることはできないが、工夫をしながら健康維持に務めている。また運動も大事なので、可能な限り定期的に外出して身体を動かしている。外出により気分転換にもなり心の健康も維持できる。買い物で外出するときはできる限り歩き、歩くことで交通費を抑えている。

また病気の予防の観点から、40代以上を対象に地方自治体が年一回実施している定期健診を受けることも大事だ。非課税世帯は無料で受けられ、それ以外の場合も少額で受けることが可能だ（がん検診も含む）。収入が少ない、または収入がない場合、医療にかかる経済的負担は大きく健康上のリスクが高くなるため、利用できる制度をうまく活用してほしい。

（とりピアスタッフ）

２０２３年度第１回理事会を開催 新年度の活動が開始される

5月14日（日）当ＮＰＯ法人の２０２３年度第１回理事会がＺＯＯＭを活用したオンラインにより開催し、２０２２年度収支補正予算案、事業報告、収支決算、財務諸表の注記、寄付者状況、監査報告、２０２３年度事業計画案、収支予算書案が協議され全員一致で承認し6月3日（土）に開催される第14回通常総会に送られた。

ご寄付ありがとうございます

公益財団法人社会貢献支援財団　様　30,000円
工藤　清　様　20,000円
武田　幸雄　様　10,000円
塩田　耕二　様　5,000円
佐々木　眞理　様　5,000円

その他寄付金は当事者団体活動を円滑にすすめていくために活用していきます。

こ ち ら 事 務 局！　今後の動き(2023 年 5 月～)

◆居場所「よりどころ」、「SANGO の会」参加に伴う留意事項の解除について

新型コロナウイルスが５類に変更されたことから、前年度まで居場所「よりどころ」当事者会・家族会、また当事者会 SANGOの会で実施してきましたマスクの着用や検温実施などの感染防止策は解除することになりました。今後のマスク着用などについては参加者の判断で対応していただけますようお願いします。なお、咳や発熱のある体調のすぐれない方のご参加はお控えください。

◆「SANGO の会」例会のご案内

２０２３年６月は下記日程にて行います。新型コロナウイルス感染予防や体調不安者に考慮してオンライン例会も併行して実施します。概ね 35 歳を基点にしていますが年齢に関係なく、ひきこもり当事者や経験者で、同様な仲間と話をしてみたい、聞いてみたいと思っている方、またいろいろな情報を得たいと考えている方は、いらしてください。オンライン例会に参加ご希望の方は当 NPO ホームページから事前申し込みが必要です。詳細は事務局までご連絡ください。

《オンライン初心者（たとえば体調不安がある人、初参加の人）例会》
とき：５月 26 日（金）午後５時３０分から７時３０分まで
開催のご案内は随時、当 NPO のホームページで公開していきますのでご確認ください。

◆居場所「よりどころ」開催のご案内（5～6月）

（当事者会）６月５日（月）※　14 日（水）　19 日（月）※
（家族会）　５月 22 日（月）※　６月７日（水）　12 日（月）※　26 日（月）※
開催会場：　北海道立道民活動センター「かでる2.7」10 階 1030 会議室
（札幌市中央区北２条西７丁目 道民活動センタービル）JR 札幌駅南口から徒歩 13 分
開催時間：午後１時 30 分から午後３時 30 分まで（短縮開催）
《オンライン当事者・家族会》
（当事者会）５月 24 日（水）　６月 28 日（水）　（家族会）６月 21 日（水）
開催時間：午後１時 30 分から午後３時 30 分まで

利用対象：ひきこもり当事者及びその家族
参加費：無料　事前申込不要　直接会場にいらしてください。オンラインは、事前申込み必要です。
※印の日は、ひきこもり地域支援センター相談員の参加予定日です

2022 年度公益財団法人日本社会福祉弘済会社会福祉助成金事業

ピアスタッフによる当事者性を活用した
ひきこもり支援拠点運営研究事業
報 告 書

－ピアスタッフの正当な対価保障を目指して－

特定非営利活動法人レター・ポスト・フレンド相談ネットワーク

☆刊行物のご紹介

ピアスタッフによる当事者性を活用したひきこもり支援拠点運営研究事業報告書-ピアスタッフの正当な対価保障を目指して-

札幌近隣の小樽市、江別市、苫小牧市で実施されたサテライト事業の内容を網羅しています。居場所におけるピアスタッフの効力と正当な対価についても言及しています。
A4 版左無線綴モノクロ全 32 頁、郵送料込１冊 500 円

刊行物については事務局までお問い合わせください

☆編 集 後 記☆

新年度最初の会報をお届けします。今年度も様々な事業が予定されています。国も新たな支援マニュアルをつくることが提示されましたが、従来のガイドライン見直しも併せて検討を期待します。

（発行責任者　理事長　田中　敦）

無　断　複　製　はおやめください